



ほめる・しかる

校長 青山龍三

あるときこんな話を聞きました。

幼稚園から帰った男の子が、「お母さんの絵を描いたよ」と、幼稚園で描いた絵をお母さんに渡しました。画用紙の真ん中には、目が一本の線で描かれた女の人がにっこり笑っています。そのお母さんは特別に何も考えず、たんすに絵を入れました。何日か経って、いつものように散らかしたものをちっとも片付けない男の子を、お母さんは激しくしかりつけました。そのとき、フツと壁にかかっていた鏡に映った自分の顔が目に入りました。眉も目も不機嫌につり上げた、恐ろしげな顔でした。考えてみれば最近毎日しかってばかりいるような気がする。自分では気がつかなかったが、そのたびに、あの鏡の中の恐ろしい顔をしていた。なのに、あのたんすの中の絵はあんなにやさしく笑っている。いつもの自分の顔でなく、笑顔の自分を描いてくれた。・・・つまり、その顔が男の子の一番好きなお母さんの顔であったし、願いでもあったのです。



先日のPTA総会でも『ほめる』ことの難しさについて話しましたが、われわれ教師もそうですが、保護者の方も同じではないかと思えます。しかし、しかることの反対を考えてみればいいのではないかと、普通のこと、常識的なことができなかったときにしかるのですから、普通のこと、常識的なことをしたときにほめてみたらどうかと思うのです。言葉も簡単に『頑張ったね』『よくできたね』『やればできるじゃない』『これでいいよ』『任せてよかった』『信じていたよ』など、一言でいいと思えます。普段しかっていたことができたときに、このような言葉をかけてあげると良いと思えます。

いちいちそんなにほめていたら甘やかすことになるなどと心配することはありません。大体が、しかることが多いのですから、ほめすぎている、と感じるくらいでちょうどバランスはとれるものです。それと、これは学校ではなかなかつかめなくてほめられないのが、テストをしたとき、そのプロセスをほめることです。いくら担任でも一人ひとりが家でどのくらい頑張ったかはつかみきれません。結果を見てほめたり励ましたりするくらいです。おうちでも同じではいけないと思えます。たとえ結果は伴わなくとも、家での頑張りが分かるのはおうちの人だけです。結果だけで判断せず、是非その取り組みもほめてほしいのです。『やっぱりお母さん（お父さん）は、ぼく（私）の事をちゃんと見ていてくれているんだ。』と、喜ぶし、安心もすると思えます。

しかし、しかることも大切です。最後に、簡単にそのポイントを。

- ・ 『しかる』と『怒る』とは違う。『怒る』は感情ですから、ヒステリックに怒鳴ることが多く、子どもの育ちの面から考えると、その効果は大いに疑問です。
- ・ その場でしかる。時間をおいてからしかるのは効果がありません。たとえお客がいてもそのときにしかることが必要です。
- ・ 例外を作らない。同じ事したら同じようにしからないと、子どもは判断の基準を失ってしまいます。

